



「臨滅度時大曼荼羅」について

解説 奥野 本 昌
写真 奥野 本 昌

日蓮聖人が池上宗仲の館において、弘安五年十月十三日入滅されるにあたり、その床頭に大曼荼羅を奉懸されたということは、『元祖化導記』や『高祖年譜』『本化別頭仏祖統紀』等その他の諸書に記されているごとくである。即ち、『年譜』によれば、十月十二日の項に、「諸子問訊。大士曰我期在_レ近、慈訓諱諱、床頭掛_二大曼陀羅_一焚香散華、誦經唱題」とあり、『統紀』によれば、この入滅の際に懸けられた曼荼羅が、「蛇形曼荼羅」と称されるもので、ここにその写真を掲載したものである。

この曼荼羅は、『弘安三年_{庚辰}三月』に染筆されたものであり、長さは一六一・五センチ、幅は一〇二・七センチで、十枚の紙を貼りたして書かれていることがわかる。弘安年間の特徴である「日蓮」の字が、花押の中へ含まれてしまっており、筆勢も雄大なものであつて、百二十余篇にのぼる曼荼羅の中でも、代表的なものの一つに数えられている。

『統紀』の説によると、入滅に臨んで奉懸されたので、古来この曼荼羅を「臨滅度時大曼荼羅」とも称されているとし、また、中尊首題の「蓮」の文字の_レが、龍蛇のごとき勢で書かれているため、人々はこれを「蛇形曼荼羅」と言うようになったのであるとしている。

真蹟は、現在鎌倉市大町妙本寺に所蔵されている。尚、富士西山本門寺日代の『宰相阿闍梨御返事』によれば、「池上御入滅時御遺告云、仏者_立墓所_傍可_ニ立_一置_{云云}。経者名_注法華_経」とあり、これは弘安五年十月十六日付で日興が執筆したものを引用したかたちになっているが、その下に、日代は「御円寂之時、件曼荼羅被_ニ尋_一出_奉懸_事顕然也。」と記している。

こうした諸文献から、宗祖入滅に際し、曼荼羅本尊の奉懸があつたことは、間違いないものといえよう。弟子信徒に数多く授与された曼荼羅を、自身の入滅に当り、床頭に懸けさしめたということも当然といふことができる。